

長崎市提案型協働事業提案企画書

団 体 名	体験学習クラブ さ~くる
提案事業の名称	ワカモノ“SMILE”サポートセンター事業
提案事業の目的	<p>今春より、次代を担う“ワカモノ（青少年）”が各人に応じた長期的な視野で、 ①<u>S</u>ocial&<u>S</u>kil<u>I</u>=他者・社会と“つながる”力、②<u>M</u>issio<u>n</u>&<u>M</u>otiv<u>e</u>=目的意識・存在意義・動機、③<u>I</u>nterest&<u>I</u>dentit<u>y</u>=各人の興味・生きがいや自他への関心、主体性・個性・独自性、 ④<u>L</u>ife&<u>L</u>ove=生活力・自他の“いのち”への信頼・敬意・愛、⑤<u>E</u>xperience&<u>E</u>ncounter=（実）体験・経験、自他との“出逢い”→（各要素の頭文字を取り、“SMILE”） を積み重ね育んでいくための「起点」となる場・機会を創り、センター以外の場所でも“笑顔”で生活していくことを目指して、本事業を実施してきました。</p> <p>「不登校」や「引きこもり」の状況にある青少年は、発達障害が背景にあることが多く、周囲の認識不足や本人の成功体験の少なさなどから、自信や存在意義を感じられる機会を損ない、悪循環に陥りがちです。</p> <p>そして、もう一つ見落としはならないのが、発達障害児・者と共に生活する保護者を始めとする「家族」の精神的・経済的負担は大きく、根本的に問題を解決していくためには、「家族の安心・安定」につながる機会を設けていく必要があるという点です。</p> <p>よって、長崎市において支援の方策・場が確立されていない中学生以上の青年期の発達障害児・者に対して、レクリエーション活動などの「体験」を通じて基礎的な社会経験、対人関係の構築の仕方を学ぶ場を設け、不登校・引きこもりの防止や円滑な対人関係の継続を促進し、併せて相談事業、保護者同士の交流の場づくりなどのサポートを行うことを、本事業の目的とします。</p>
課 題 の 緊急性・重要性	<p>本事業の中で、特に深刻な現状課題を持っている対象は、さまざまな要因から「生きづらさ」を感じている（及び本人が自覚していないが、そういう要素を多分に持っているも含め）青少年、及びそのご家族です。今年度事業を実施した中で特に反応が多く、ニーズが見えた対象が、中学校の2～3年生です。</p> <p>小学校からの環境の変化の大きさと相まって、心身がアンバランスな状態にあることや、一定期間「親子とも頑張った末こらえきれず、環境への適応の難しさが顕著に出る時期」というのがその要因と思われます。</p> <p>「不登校」や「引きこもり」の増加はより深刻な状況となっており、その背景には、先に触れたように発達障害が背景にあることが多いですが、長崎市において中学生以上の青年期の発達障害者への支援はまだ確立されておりません。</p>

<p>協働の必要性</p>	<p>①団体は、今まで培ってきたノウハウはあるが、独自で本事業を実施するには、交通の便が良く使い勝手のよい施設の確保や利用者の経済的負担の軽減、市民や学校・関連機関などからの安心感・信頼感を得ること、広く情報を市民に提供することが困難である。</p> <p>②長崎市の中中学生以上の発達障害児・者への支援はまだ確立途上であり、本事業は特に中中学生以上の青年層の不登校・引きこもり防止に有効であると考えますが、行政だけでは、それに対応するノウハウが不足している。</p>
<p>協働による相乗効果</p>	<p>①交通の便がよく、設備・スタッフのサポートがある環境を提供することで、市民（利用者）の利便性の向上が図られる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>様々な面で活用しやすい「開かれた体験・交流の場」が整備されることにより、多くの青少年が利用でき、地域社会の中で“生きやすくなる”道筋が拓け、そのことにより家族も力づけられる。</p> <p>②長崎市において、中中学生以上の発達障害児・者への支援策は確立されておらず、協働事業として実施することにより、行政が持っていない知識や経験を活用できる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>本事業の実施により、当事者の課題がより詳細に把握でき、新たに取り組むべき方向が明確になる。</p>
<p>協働の役割分担</p>	<p>1 提案団体が果たそうとする役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者のニーズに合わせたレクリエーションや体験活動などの企画及び実施 ・利用者やその家族からの相談支援 ・関係機関からの情報収集、発信 <p>2 本市に期待する役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係課（機関）との連絡調整 ・市民（学校、関係団体等）への広報 ・本事業を実施するための活動場所の提供
<p>提案事業の内容</p>	<p style="text-align: center;">「ワカモノ“SMILE”サポートセンター事業」</p> <p>目標</p> <p>さまざまな要因から「生きづらさ」を感じている青少年が、各人の対人関係・問題解決のスキル、自他の肯定感や目的意識を高めるための体験・出会いの場と機会を創る。</p> <p>成果</p> <p>上記のような場・機会があることにより、各人の「二次障害（自己否定・反抗的態度）」・「三次障害（不登校・引きこもり・反社会的な思考や行動）」が引き起こされることを未然に防ぐとともに、それぞれが主体的・意欲的に地域社会の中につながり自らを生かしていこうとする。</p>

	<p>内容</p> <p>①交流・体験活動 各人のニーズに応じたレクリエーションや自己表現などの活動を通じ、相互に安心感を持ち、関係性を深めていく場を創る。センターでの他者との関わりや、イベントの企画・準備などへの参画を通して、各人が自ら生活・余暇を充実させていくための「体験学習」の機会も設ける。</p> <p>②相談・カウンセリング 日常的に気軽に様々な話しが出来る「場と関係性」を創り、各人の希望や必要性に応じ個別に対応し、適切な関係機関などと連携を図る。本人のみならず、保護者からの相談にも対応し、信頼関係を深める。毎月ごとに保護者同士の懇談会を実施し、保護者同士がつながるための関係を育む機会を設ける。</p> <p>③情報収集・発信 個々の問題解決や希望の実現、生活の充実につながるような、人・場・機会の情報を収集するとともに、年間3回発行の「センター便り」や講習会・懇談会などを通じ、関係機関等への情報発信を行う。</p> <p>実施日程 開設・報告準備等は事業実施期間内で行い、センター開館・対応事業は、平成23年4月18日（月）～平成24年3月12日（月）までの祝祭日・8月・年末～年始等を除く、月曜・木曜の18：30～21：00（各曜日35週・年間70日）。その他、ニーズ対応や理解促進のための講習会・懇談会を半期ごとに1回ずつ開催する。</p> <p>参加予定対象および人数 対処療法的な対応だけでなく、問題が顕在化・深刻化する前に対応していく意味合いも含め、中学生以上（年齢の上限は設けないが30代位迄を目処とする）を対象とする。利用人数は一日当たり15名前後と見込んでいるが、ニーズがある人に情報が届くよう、広報に力を入れる。</p> <p>実施場所 松山児童センター（長崎市松山町4-34）</p> <p>予算額 収入・支出ともに年間1,875,000円（詳細は別紙予算書参照）</p>
<p>提案事業の実施体制</p>	<p>1 統括責任者 吉田 伸吾</p> <p>2 事業実施体制</p> <p>①センター開館時対応 事業責任・担当者 吉田 伸吾・久保 拓也（専従2名+10名程度の登録スタッフの中から8名程度は対応できる体制をとり、原則計10名で利用者に対応）</p> <p>②準備・事務作業、相談対応、講習会・懇談会やイベントの企画実施 など 事業責任・担当者 吉田 伸吾・久保 拓也+必要に応じ、上記スタッフ</p> <p>3 事業実施にあたっての専門性やノウハウ ・統括責任者：吉田 伸吾（実績・経歴の詳細については、別紙参照）</p>

	<p>長崎大学教育学部卒業。有資格：小学校・中学校（美術）教員免許、文部科学省認可・（社）日本キャンプ協会公認指導者 キャンプディレクター1級等。</p> <p>約20年に渡り、青少年の体験・育成事業や発達障害児・者の支援に携わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業担当者：久保 拓也 <p>長崎大学教育学部卒業。有資格：小学校および特別支援教育教員免許。</p> <p>学生時は青少年の体験活動サポートの中心的なボランティアリーダーとして活動し、平成22年度より、提案型協働事業の実施スタッフとして実動中。</p>
<p>事業スケジュール</p>	<p>第1四半期・4～6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月1日（金）～受け入れ体制・活動内容の確認・人員調整、開設準備。 ・4月上旬より、広報誌・リーフレットなどでセンター活動を市民に告知。 4月18日（月）～センター開設予定。 ・利用者のニーズに応じ、活動を行う。 ・アンケート調査①実施（6月） <p>第2四半期・7～9月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1四半期の状況を踏まえ、個々の利用者への対応を見直す。 ・センター便り①発行 <p>第3四半期・10～12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己表現が引き出され、相互の交わりを深める為のイベントの企画・運営。 ・保護者向けの講習会、または懇談会（10月中旬）を開催。 ・アンケート調査②実施（10月） ・センター便り②発行 <p>第4四半期・1～3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート調査③実施（2月） ・センター便り③発行（3月） ・一年間の個々人・全体の変化や効果をまとめる。 ・保護者向けの講習会、または懇談会（3月上旬）を開催。
<p>事業の展望及び今後の活動展開</p>	<p>本事業は、「そこに留まる場」を創ることが目的ではなく、それぞれが「自分がいる場所・日常の中で自分を活かしていけるような体験の機会・循環を創る」ことを目指しています。一方で、何かあったときにはいつでも気軽にアクセスし立ち寄れる「HOME」的な場の必要性も感じています。</p> <p>そのためには、事業の効果・成果を「可視化」できるようにし、このような取り組みの必要性・重要性を地域社会全体に継続的に発信し続け、一過性の事業で終わらぬよう利用者がセンターの利用を終了した後も、必要なサポートや情報提供ができる「場」として存続する必要があります。</p> <p>可能であれば、3年目以降は日中の対応や、様々な分野・世代のリーダーシップ（地域の中にいる人材）も活かしながら、既存の「子育て支援センター」のように、独立した拠点として運営していければと考えています。</p>